「教育実習を振り返って」

［公立中学校　保健体育］

私は三週間、中学校での実習を終えて、多くのことを学ぶことができた。

体育の授業では、男女一緒に行っていたため、試合形式で行う際に女の子の生徒がボールに触らず、男の子の生徒ばかりが触ってしまうことが見られた。ルールを工夫することで、全員が参加できる形を作っていけることが分かった。

学年やクラスごとに運動への積極性、技術のレベルが全くもって変わるため、ルールの他にも授業の展開も変える必要があると感じた。毎時間反省し、どこをどのように変えれば、生徒が主体的に学ぶ授業を作ることができるのかを常に考えなければならなかった。

道徳の授業では、学びのテーマに沿って教材をもとに、生徒の実態に合わせたねらいを考える事から始めた。大きな柱となる中心発問を考えることができれば、それ以降の発問についても考える事ができた。導入からまとめまでの全体の流れを考えて板書計画まで行ったのだが、二日ほど前に短縮日課であることが分かったが、5 分だけ短くなるようだったため、生徒が考える時間を短くしたり発表の時間を減らせば大丈夫だと思っていたが、授業の 5 分はとても大きいと感じた。自分でなかなか考えられない生徒に対して手立てを与えるために、一人ひとりの席を見て回り、それぞれにアドバイスの声掛けをしていると、最後のまとめの時間が思うように取れず、時間内に終わることができなかった。板書の慣れや手立ての仕方を工夫すれば時間の確保はできるようになっていくのではないかと思った。

職員室では学年の先生ごとに席が決められており、朝は忙しそうにしている先生が多いようであったが、放課後では体育祭や今後控えている校外学習、新人戦期間の動きなどの会議を行っている様子が見られた。学年の先生によって話し合いの活発さに違いもあり、横のつながりも大切なのだなということも改めて感じた。同じ教科の先生、学年の先生は特にコミュニケーションを図り連携を取ることが一日中あるため、とても大事だと感じた。

生徒の実態を感じ取ることができる三週間にすることができた。自分が中学生であった時に比べ、内向的で話しかけたりしに行かなければ、心の距離を縮めることが難しいと感じた。生活ノートというもので毎日文面でのやり取りはしていたが、そこから話題を持ちかけて話しかけにいこうとしても中々会話が続かない生徒が多くとても苦労した。それでも悪はなく、素直に話しかけに来てくれる生徒もいれば話しかけに行ったとしても笑顔で話してくれることにとても救われた。

この三週間で学校教員の仕事の大変さについて身を持って知ることができ、やりがい、楽しさについても共に実感できた貴重な時間を過ごすことができた。